



路傍詩

○

○

菊葺山の童に謚す

一三野縁純詩兄捧ぐ

赤々な心を校ゆ出して
息を喰き上ぐ草ッ葉の笛

子供は野性に胞衣を朗々と
くちてはあまぬまりを焦ッか
ける

見ろ！

塩ッはい大空一杯を馳せめぐ
るッだ

・松本純一

間道

石川武夫

朽ちかけた電柱
——錆びた鋼線が折れ出て
ある

蔽ひ被さる繁みから
小さな青空が見え隠れして
耳の底の方で
日ぐらしが鳴いてゐる

眼ざめ

五十嵐せつを

澄んだ 蒼空は

青い素絹の感觸――

觀望のさめた後のうれひは

破に寝て

ひっそりと大地のうたをきく

こころ

海濱小景 他一篇

高橋水聲

かうみ終つたツムのやうな

破に運はれ 運はれ 運

運はれ たツムをみつめる

海濱のあまつこころ 海女ツこころ

父ツつあ おいら 待つてたさ

父ツつあ 父ツつあ けへつた

父ツつあ けへつたり

買ふてやろつちやう

あけえべ 買ふてくれつか

よう

蚕

思ひきりふくれ上つたを

いきなりつぶしたり

いす黒い血が

肌一ぱいにひろかつた

あゝ なんと言ひきびのよ

さたらう

もつと居やしないか

蚕――のみ

ふくれ上つた

緑心 他一篇

高瀬勝男

俺ははだけけなレの山にかち

かんた

とを雲の声 きれにかきなれば

しろかつてゆく

このまんまして俺は一本の草

草となつちやつて

つぎつぎに心かりなる緑にう

つれ

カンカシ玉疊りほせ
にちんだ晒の張る台場
杏のももねカリカリと
やめき
もっこのいる髪毛

潮時かふくらみにさせは
いちきしめつく絃線にはち
けた コワイロ 幽明並葉

待男今宵 次夜
こつそり 呼べなまあかり

水鏡 水鏡
ふたにわびしくうづなく流
台場

（おとなしき少女たちにおくる）

中野勇雄

その朝の鏡の中
に
さもしぎ眼あり

黄曰射すや裨經疲れ肉体も
病みであるなり

かくて窓の如くに
昼あきの蟬を待つかな

三野混沌

ふきのこの風のふいてゐた
うちの子供がふいてゐた
土の上にちかちかよつて
おきつぎにちかちかよつて
た

上では
なしの花が咲いて
さきおしてゐた
さうする
おはきちかへにでもなりそう
お

人間は虫けらと同じだ
 おれは虫けらと同じだ
 五をなめあつて多おれしと同
 じだ
 そして宇宙が俺にある
 お、この肉体から
 おれの生活は采女で来た
 愛らしき肉体だ

お、中は地がもくぐりくる尤き、
な自然の仕事だとはつきりた

見える力

松本純一

てのひらを握りしめ
しやぶる子供は素裸だ
空に鳴る色づいた梨も
すきとほる皮をおつくが

脹れぼつたおとらしい
そのあんよの動きに
心歪めて走る土くれの
と
皆んな
歌う知らない小島の巢にはら
んだ

編輯方言

・お豆にありのまゝの生活をしてゆかう
・幾多には粉飾は必要ありません
・只我を現見すればよいのです
・それには幾ゆる規斜を起元して家
・徴することには最も節度ある愛と感
・いなくては駄目だ。

・高麗勝の力

・皆んな！ とうない三野氏の生活意欲
・の制作は、ほんとうに素晴らしいものだ
・中七輯、かくてよき詩をおめて惜の
・望まるときへた、ふうこばしいことだ
・題の大字式所請、目安なる常読の羅
・列はおれたちの詩におぶるもおつけなく
・消滅してどう能うた難言、近頃の性急。

・松本純一

・1926.8.2の発行

福島県市原郡平町町六十二番地

「路傍詩」社

